



TITLE:

物價騰貴と通貨との關係に就て汐見學士の教を乞ふ

AUTHOR(S):

福田, 徳三

CITATION:

福田, 徳三. 物價騰貴と通貨との關係に就て汐見學士の教を乞ふ. 經濟論叢 1919, 8(3): 400-406

ISSUE DATE:

1919-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/127498>

RIGHT:

物價騰貴と通貨との關係に就て

汐見學士の教を乞ふ

福田 徳三

本誌前號掲載汐見學士の論文『我國現時の物價騰貴と通貨との關係』は我々に取つて甚だ貴重な研究で、學士の云はるる通り結論計り示して其學證に怠つて居る我々は學士の教を得て大に反省の機會を與へられたものである。實は我輩も昨年來日本銀行調査局の巖谷冬生君の熱心なる助力によつて材料だけは多少集めて居るのであるが、之を利用する餘暇を持たない爲め不本意乍ら結論擧進者の仲間入をして居る次第で、今更汗顔の外はない。先頃飯島幡司君の『金融經濟論』に示された統計に對して若干の疑を起しフツシャー説が其儘明治年間の我邦に適用せられることを十分に首肯し得ないで質疑の一文を草したが、無殘にも一喝の下に撃退せられて其儘になつて居るのである。併し材料だけは其後も怠らず集めては居るが、是又多忙の爲めに其儘に打捨ててあつて、唯だ飯島君の概括論には如何しても承服出來難いとの印象を深くして居るのみである。然るに汐見學士此度の研究は我輩が着手せんと常に志しつつ能はざりしことを試みられたので、其點丈けでも深く感謝するのである。況んや其は聽て我邦刻下の大問題の解釋と解決とに寄與す可き所甚大なるに於てをや。故に我輩は深き尊敬の念を以て學士の論文を三讀四讀したのである。

既に學士が此れ丈の勞作を試みられた以上、我々の仕事は餘程樂になつたもので、繁忙の間に寸暇を偷む外ない我輩も學士の賜を更らに活用す可く勉めたいと思つて居る。就ては讀過數遍猶釋然たり得ぬ點が二三あつたから取あへず其事を開陳して教を得たいと思ふ。思ふに本誌の讀者の中感を我輩と同ふせらるる仁もあるであらう、然らば學士の再教を得ることは決して我輩一人の幸たるに止まらないことと信ずる、

第一は季節的變動のことである。學士は(前號二六八頁)『通貨の月本流通現在高、日銀兌換券の毎月平均發行高、及日銀調東京大阪物價指數に就て明治四十二年乃至大正二年の最近五年間の毎月平均を取り次の如き季節的變動を得たり』として精密なる一表を掲げられたが、此表作成の材料及其取扱方に就て何の説明も下してない。一月より十二月迄右各項に就て『自然數』『對數』『前月比較』の三目があげてあるが、其月は何年の當該月であるか五年間の各曆月の平均數の平均であるか其れとも或曆年の平均數であるか判明しない。殊に東京大阪の物價指數に(千圓)を單位としてある譯に至つては如何考へても判らない。恐らく筆者以外其理由の分る人は一人もあるまいと思ふ。此は是非説明を願ひ度いものである。又た『自然數』『對數』の意味、殊に『對數』の算出法も御教示に預り度い。

第二、價格の騰貴と物價の騰貴に就て伺ひ度い、學士は『以上論ずる所に依つて之を見れば戦争開始以來最初二ヶ年は特殊貨物の價格騰貴に過ぎざりしなり、一般物價騰貴の狀況を呈したるは最近の事實なりとす』(二七五頁)と云つて居られる。然るに學士の示されたる表によれば

東京物價指數總平均修正數 (二七一、二頁)

大正三年			大正四年			大正五年		
七月	九月	十二月	三月	六月	九月	十二月	三月	六月
100	101	102	103	104	105	106	107	108

であつて、大正三年十二月と大正四年三・九月とを除けば物價は騰貴して居るのである。殊に大正四年十二月(開戦後約一ヶ年四ヶ月)からはずつと騰貴して居るのである。之れが如何して特殊價格の騰貴に過ぎず一般物價の騰貴でないことになるのか我々には會得が行かない。従つて『一般物價騰貴の狀況を呈したるは最近の事實なりとす』との學士の斷定の意味が諒解し得られないのである。今少しく御説明を願ひ度いのである。

第三、價格の集大成と云ふことに就て、

學士は右に續いて『世人動もすれば最近の狀況を見て一概に通貨膨脹に基く物價騰貴と云ふ、されど價格騰貴先づ起り、これが集大成して物價騰貴を呈したる極めて稀なる一事例たることは上述の説明によりて明ならん』(二七五頁)と。此意味も分らない、『價格が集大成したのでない物價』なるものがあるならば兎に角、今日我々の云ふ物價とは學士も示された通り、Pricesのことである以上、箇々の價格が集つて物價と呼ばれるので、従つて物價騰貴とは、價格騰貴が先づ起り其れが集大成せられて物價騰貴と云はれるので、『極めて稀なる一事例』でないのみか、一の取除なく常に終る可き筈ではないか。此點も御教示に預りたいのである。

第四、最近の具體的變動に就て伺ひ度い。學士は(一)戦前(二)開戦後第一期(大正三年より五年迄)(三)

同第二期(大正五年以後)の三期に分たれて、第一期に於ては通貨も物價指數も其の變動の幅は平時と大差なしとせられたが、第二期に就ては、大正四年に於ては東京指數の幅は一七・八%大阪同、一八・四%實に近年未曾有の變動の幅にして、平時の幅の一・八%乃至二・一%に比すれば約十倍に當ると示された。然るに通貨の方は二六・一%日銀兌換券は二八・一%にして平時に比し其幅多少大なりと云ふに止ることを示された。此は甚だ有益なる試として切に感謝する所であるが、此れより結論を下して『物價は大正四年の始より少々騰貴し始め(中略)秋に入り殊に十月より急に騰貴し(中略)然るに通貨は大正四年十二月より五年一月にかけ膨脹せしもこれ季節的變化より見て何等異とするに足らず、故に眞の膨脹は大正五年より始り』(下略)と斷せられた。従つて又此期に於ては『通貨の膨脹は物價騰貴の原因と云ふ可からず、寧ろ物價騰貴の結果と云ふ可きなり』(二八一頁)と結論せられた。此點が十分に理解し難いのである。今學士の示された數字をあげて見ると。

	日銀兌換券	東京指數
大正四年一月	五九・三六	一一〇
二月	四九・四五	一一三
三月	三九・四六	一二四
四月	三六・四四	一二九
五月	三六・二六	一三六
六月	三九・七五	一二九
七月	四〇・三三	一二三

時事問題

物價騰貴と通貨との關係に就て沙見學士の教を乞ふ 第八卷 (第三號 一〇九) 四〇三

八月	NOV 1933	三三
九月	NOV 1933	三三
十月	NOV 1933	三三
十一月	NOV 1933	三三
十二月	NOV 1933	三三

兌換券も大正四年五月から始終増加のみして居るのである。殊に十月以降物價指數も兌換券額も増加して居るではないか。『季節的變化より見て何等異とするに足らず』と云ふことは右の兌換券増加の事實を左右することは出来ないと思ふ。少くとも五月から連續して増加し來つたこと其事は否定し得られるものではないと思ふ。此點今少しく詳解を乞ひ度いのである。然らざれば此期に於ては物價騰貴の方が原因だつたと云ふ結論は『結論のみ明瞭に示され前提たる可き數學的根據に關して一舉手一投足の勞をも惜む』と學士が難ぜられた小川博士以下我々と分つ所ないこととなる恐があると思ふ。

第五、變動の幅の比較と云ふことに就て、第三期に就て學士は『大體に於て變動の方向を同ふし且つ幅も同様に大なり』と示された。是又甚有益な結果として深く敬重す可き所である。然し其に基いて立られた推論は甚だ難解である。「世人往々物價騰貴と通貨膨脹兌換券増發とが殆んど同一比を呈せるを見て物價騰貴の因を通貨膨脹特に兌換券増發に求め其間因果關係の顯著なるを説く者あり、然れども其は餘りに機械的に過ぎたり、繰返して云ふ、本來物價變動は其幅狭く(約二分)、通貨總額兌換券は其變動の幅大(約二割)を常とす。本來變動の幅狭き物價と本來幅廣か

るべき通貨兌換券とか殆んど同一比を以て増加膨脹せることはやがて物價騰貴の勢が通貨膨脹の勢よりも甚大なるを示せるに非ずや、若し其間因果關係を求むべくんば騰貴の度著しき物價に其因を求め膨脹の割合少き通貨に果を求むべきにあらざるか、虚心坦懷の一讀書生は此結論に到達せざるを得ざるなり(二八二、三頁)と。此一條は蓋し全文の骨子にして學士が刻苦精勵の結果到達せられたる頗る重大の論斷である様に拜讀した。即ち學士は『變動の幅』と云ふ鍵を以て此難問題を解答せんと試みられたものと思ふ。我輩は深き尊敬を以て此一條を讀み且つ熟考反省したのである。併し乍ら未だ十分に會得し得ないを悲しむのである。

『變動の幅』と云ふ事其事に就ても若干の疑があるが、其れは追つての事として、當面の問題のみに限つて學士の教を取敢へず乞ふこととする。本來二%なる小なる幅を有する指數と本來二〇%なる大なる幅を有する通貨とが、此第三期に入つて殆んど同様に幅廣き變動(増加)を爲した事は其變動が物價の上に大にして通貨の上には其れよりは小に當ると云ふことは、學士の示された通りであるが、其れから直ちに其變動の原因が物價に在りとの結論が如何して出て來るか、言ふ迄もなく變動の大小と其の因果關係とは凡で別物である。是れが(第一)論理上に於ける大なる疑を起す點である(第二)通貨の分量と物價とが直ちに同様の變動の幅を有す可きものでないことは、貨幣數量説論者と雖も之を認める況んやブツシアーの新貨幣數量説に於ては $P = \frac{M_1 + M_2}{V}$ と論じて居るのは誰人も知る所である。單に M 計りを P と比較する如きは、今日誰も敢てせざる所である。況んや此説にも従はざる者に於てをや。兌換券の増發、通貨(學士の意味による)の増加計りが、

物價と當面に相對するのではない、通貨(同上)の膨脹は信用の膨脹を伴ふ、物價は此等一切の或は果たり或は因たるものである。本來二%しか幅のない物價が二〇%の幅を有する通貨と同様の幅を以て騰貴したことは端的に此の作用にこそ聯想せしむれ、學士の結論へ一足飛することを許すものとは思はれない。學士は少くともフツシアアの V や M や V' や M' を如何に考慮に入れて右の結論に到着せられたか、此點御教示に預り度いのである。而して學士が最重きを置かるる「物價騰貴の原因は通貨の側に存せず貨物の側に存す」との結論に對する賛否は當然之を最後迄留保する外はないことは附言して置かねばならぬ。何となれば學士は騰貴の原因が貨物の側に在りとの斷案に對しては、積極的に何等の證明をも下さず(二七三—五頁に價格騰貴の原因は詳に列舉してあるが、其れには何等數字的證明が伴つて居ない)學士は前號の論文に於ては、専ら『物價騰貴の原因は通貨に存せず』との消極的證明のみを試られたので、其消極的證明其ものが十分に呑込み得ない我々は、更らに驀進して其原因貨物の側に在りとの結論に飛び行くことは到底出来ないものであるからである。然し學士にして更らに積極的に數字的舉證を試みて物價騰貴の原因貨物に在りてふことを示さるるならば、消極論に就ての若干の疑の如きは姑く之を放擲するも差支なしと信ずる。物價騰貴の原因貨物の側に在りてふ斷案其ものを數字的に又た具體的に詳示あり度いものと切に願ふ次第である。此點筆序に添へて申上げて置く。兎に角近來稀なる周到精密の研究に對して重ねて滿腔の敬意を表明し、更らに垂教の勞を惜まれざらんことを切望する次第である。